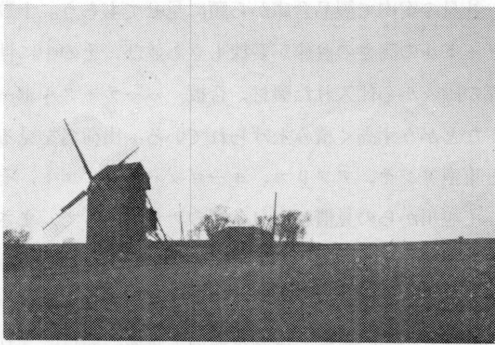


欧米の林産業視察記（４）

北 沢 暢 夫



畑の中にある風車

エーランド地方を走っているとき、はじめてヨーロッパ風情をほうふつさせる風車にお目にかかった。10日あまりの旅行ではついぞ見かけなかったが、この付近ではあちこちに見える。海は見えないが、カモメが沢山飛んでいることから、ベーリング海に沿って走っているであろう。また、ところどころに設けられているコンクリート製の大きな貯水槽。それらはいずれも公害に犯されず、水と森林と芝生の美しいスエーデン国そのものにマッチして、長時間一行の眼を楽しませてくれた。

10時30分にカルマーのエッソ・モーターホテルを発ってから延べ5時間20分、バスはスエーデン最南端の要衝マルモー港のフェリー発着場に直進、そのままポートに乗船。出発以来ジェット機と貸切バスのみで旅をし、いささか変化を求めていた矢先だけに、わずか1時間足らずの船旅ではあったが、結構印象的な感が深かった。甲板へ出てヨットの群など周囲の景色をカメラに収める者、数量制限の免税たばこを列に並んで仕入れる者など、視察目標の主軸としてきたヨーロッパ地区の旅行を無事終えて、出発前いたっていた外国旅行に対する不安感がかなり薄れてきたことが、面々の表情から読みとれる。

- ・コペンハーゲン（Copenhagen）
北欧の最大都市で、国際都市としても有名なコペン

ハーゲン、佐々木女史の説明によるとヨーロッパで最も美しい街と評価されているそう。なるほど道路ぞいや建物の周辺に樹木が多く、ことに住宅、庭の外周はほとんど生垣がめぐらされ、アパートの前庭も部屋単位でよく手入れされた生垣で区切ってある。それらがまわりの建物とほどよく調和して、コペンハーゲン特有の都市美を形成しているのであろう。

港からホテルに向う途中、すれ違ったアメリカ人旅行団のバスに、てい重な礼を述べるいとまもなく佐々木女史は、手を振り振り移乗してしまった。このあと引続き彼等を案内することになっていたらしい。それにしてもこの一週間、熱心によく通訳してくれた。外国で活躍する日本人として、一層のご健闘を祈る。

Thank you very much !

30分の乗車で18時35分、市の繁華街中心部にあるパレスホテルに到着、そこでアンダーソン君とも別れ、すぐ近くの日本料理店で夕食をとる。2週間ぶりにありつけた日本食ということで、早速日本酒、まぐろのさし身、すき焼など勢いこんで注文したまではよかったが、酒の高いこと、まぐろのトロは筋だらけとあっていささか幻滅。ゆっくり飲みあかす気にもなれず、早々に退散。金曜日は連休前のため閉店時間は普段より遅い由であるが、20時過ぎともなれば開いている店はごくわずか。ただし、観光客目あての特殊品売店だけは夜中まで営業していることを聞き及んで、それぞれ土産物を求めておのずとそちらへ足を向けるのも、外国旅行者の習性とでもいえようか。

7. コペンハーゲン ロンドン シアトル

5月12日（土）晴コペンハーゲン ロンドン

9時40分、スカンジナビヤ航空501便でコペンハーゲン空港を発進、デンマーク上空から北海（North Sea）をひとまたぎ、赤い煉瓦建てが整然と立ち並ぶ住宅街を眼下に見下しながら、11時13分ロンドン郊外

のヒュスロー空港に着陸,そこで北海道のインチ材などを扱っているバイヤー,ロイド・クレイグ社(Lloyd Craig L.T.D)のロナルド・クレイグ氏(Mr.R.A.Craig)の出迎えをうけた。

・グリクステン・ハードウッド社(Gliksten Hardwoods Limited)

通訳は若干なまりはあるが流暢な日本語と英語をあやつる韓国系婦人で,昼食をすませてから市内目抜き通りを通ってグ社を訪れる。あいにく土曜とあって従業員は誰もいなかったが,社長のコルソン氏(Mr.J.J.Colson)氏とTimber Trades Journalの記者が待っていてくれた。コルソン社長の説明によると,当社は世界各国から家具・内装を主とした各種の代表的広葉樹材をはじめ,丸太・合板・ハードボード・パーティクルボード等の木製品材料を手広く扱っており,帯のご盤による製材施設2系列のほか,大型人工乾燥室20基を備え,当所のみで約10万m²の敷地を所有,従業員は100名を擁するイギリス有数の木製品総合取扱い会社である。



G.H.L社の製品倉庫

日本からは昨年(47年),ヨーロッパ扱いの8%に相当する20万沢3のナラ材を輸入したが,売れ行きはまことに良好で,まだまだいくらでも輸入したい希望をもっている。ただし最近日本での値上がりが著しく,合理的な価格にならなければ,取引は困難であろうとおっしゃる。むべなるかなか。

また日本ナラの板厚割合の希望を尋ねたところ, 1 および2 がそれぞれ25%, 1¹/₂ および1¹/₄ "が10

%。3/4 5%その他25%という回答であった。とくに3/4ルのコフィンの需要については,近年プリント合板が普及したことによって,むく材は上流階級の一部に限られ,今後は一層1,2 が主体であろう...と。

社長の案内で製品倉庫から順に見せてもらう。十数メートルの高さの倉庫が幾棟も立ち並び,その中に世界の国々から仕入れた製材,合板,パーティクルボードなどがうす高く積み上げられている。出荷名を見ると東南アジア,アフリカ,ヨーロッパ,ソビエト,そして旭川からの見慣れた1 厚のナラも混って,まさに"インターナショナル・ハードウッド・カンパニー"の名にふさわしい製品がぞっくり。それらは港から直接,小型の曳船で掘割を通して倉庫に横付けされる。原木置場にある1m前後の丸太は,すべてアフリカから輸入した広葉樹とのこと。外観は東南アジア地域のものに似ているが,材質は極めて優秀である。東南アジア材も丸太で一時的取り引きしたが,材質的に劣り,期待外れだったそうである。



土場のアフリカ材

人工乾燥室は,コンクリートで固めた広場を囲む形態で3ブロックに建てられ,すべて自動制御化されているとみえ,人影は全くない。樹種,含水率,寸法などによって,入炉時点でスケジュールNo. が決められるとのこと。1つの炉の小扉を開けて顔を突込んだ感じでは,70~80 程度と思われた。

2系列配置してある製材機はいずれもフレームが鉄板製の帯のご盤で,ここでは特殊注文だけを挽材するらしく,本体以外はこれといっためぼしい搬送施設はなく,もっぱら銘木級の原木が対象と判断された。

広い構内を一巡し、会議室でコーヒーをご馳走になりながら前記の話など伺ったわけであるが、その間会議室の内装に興味もたれた。広葉樹の短尺材(長さ1フィート)を巧みに組合せた床、ほぼ等間隔に節の含んだ針葉樹材の平角を高低をつけて平行にセットした天井など、とくに凝った細工とは思われないが、木材の自然の味を生かしながら、さりげなく上品さを匂わせるデザインは、無節・無欠点を追い求める日本人的感覚と対比し、かなりのギャップがあるように感じられた。

・ハロッズ家具展示場

T.T.J.の記事にしたいということで、前出の記者に写真のポーズをとったあと16時少し前にグリクステン社を出て、ロンドン最大規模といわれるデパート・ハロッズ(Harrolds)の家具展を見に行く。展示場は家具のほか関連調度品も並べられ、いくつかのコーナーに区切られている。それぞれの製品に応じ照明をこらし、西洋風あり、中国風あり、さまざまに陳列、いかにもお国柄を偲ばせる展示方法で、見る者の眼を楽しませてくれる。さすが広葉樹を使った英国調のしびい高級品が多いが、ヨーロッパ産針葉樹材の製品も結構出品されていた。中に、外観がいかに何百年前に使われたかのようなデザインで、歴史的痕跡まで疑装した復古調風の新作家具には驚かされた。

夕食後市内見物に繰り出したものの、繁華街には国籍の見当のつかない若者がウヨウヨ。酒酔い連が多く、いささか恐れをなして、ようやく拾った6人乗りタクシーで宿へ帰る。

5月13日(日)晴 ロンドン シアトル

・ロンドン市内観光

1日すこたった1本の運行しかないロンドン シアトル直行便は夕方になるので、それまでの間クレイグさんも加って市内の名所・旧跡巡りにでかける。テムズ河に沿ってその威容を示す巨大な国会議事堂、侵略してきたロ・マ軍に屈服せず最後まで抵抗したといわれる女王の像、900前からの皇族の遺体を床下におさ

めてあるウェストミンスター寺院、真黒な熊皮製の帽子(本皮とのこと)に真赤な上衣を着用して馬にまたがり、世界の人達に顔見せしている近衛騎兵隊の番兵、トラファルガー海戦で大勝利を収め、イギリス帝国の危急を救ったネルソン提督像を頂上にしつらえたトラファルガー広場の一角に高く奪え立つ戦勝記念塔、テレビなどでわが国にもしばしば紹介されてきたバッキンガム宮殿と、その真向いにアルバート侯がビクトリヤ女王にプレゼント、100年前に建設されたという金色の女王の像など、急ぎ足ながら一通り見てまわる。



ロンドン娘と石川さん

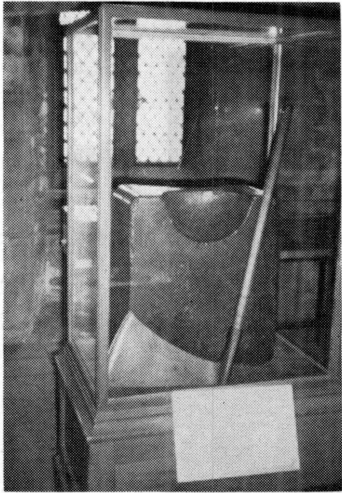
昼食をすませたのち、シェクスピアの銅像のあるシェクスピア公園で小休止、にぎやかな人通りの真ただ中のトランプ賭博にびくつきさせられたり、買い物に来た可愛いロンドン娘

に話しかけ、並んで写真をとるなどしてから、ロンドン名物の代表の1つであるロンドンタワーに入る。テムズ河の水域を利用して築かれたこのロンドン城。今こそ多くの人々の観光の場として昔時のよすがを想起させるのみの建造物にすぎないが、かつて幾世紀にわたって大英帝国の名のもとにその海軍力にものをいわせ、多くの植民地を足がかりに世界に君臨した当時のこのコンクリート製の城には、筆舌に尽し得ない凄惨な絵模様や限りない栄枯盛衰の歴史が刻みこまれているにちがいない。入口の跳ね橋付近で見かけた城で飼育されている飛べないカラス、往時さながらの服装で警護している番兵、王子共々首をはねられたレイ何世かよろい・かぶと、世界最大のひすいや沢山なダ



ロンドン城に入る一行

帯から黒々と広がるロッキー山系の樹海を眼下に見下ろしながら、20時にチャトル空港に着く。この間の滞空時間が6時間余りあるのに、ロンドンを発つとき見た月がシアトルでいくらか違わない位置にある。空港出口の荷物とパスポートのチェックは意外に厳しく、ヒルトンホテルに入ったときには21時30分を廻っていたが、ホテルに王子製紙アメリカ駐在の林義夫さんが出迎えてくれ、早速ロビーで明日からの行動予定を打合わせる。



人斬りまさかり

イヤモンドをちりばめた本物の王冠、純金製の皇室調度品や実用したといわれる武器の品々、捕えた敵の部将達をはじめ身内の皇族の首までも切り落したという無気味なおの

と首切り台、大勢の皇族・貴族をへいげい、その威武をいかに誇示したであろう石造り(床、柱)の大広間、そして当時あっては超巨大であったと想像される城郭の威容など、まさに見応え十分なものであった。しかし一面、案内者の説明に耳を傾けているうちに、過ぎた昔の出来事とはいえ、この城を舞台にくろげられた幾多の陰惨な歴史的事実には、いささか背筋の寒くなる思いを禁じ得なかった。

15時30分、遠路リバプール(Liverpool)から休日にもかかわらず案内のために来ていただいたロナルド・クレイグさんに厚く礼を述べ、ヒスロー空港に向う。

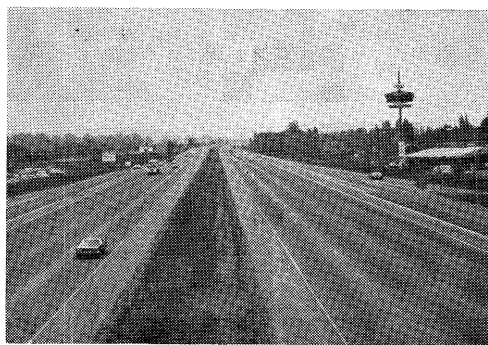
パン・アメリカン航空123便は17時45分定刻で離陸、途中北極圏のアイスランド、グリーンランドからカナダ上空をやや斜めに突っ切り、青白く輝く氷原地

8. アメリカの林業, 林産

5月14日(月)晴 ウェアハウザー・ロングビウ工場

木材の総合加工生産で世界No.1を誇るウェアハウザーのロングビウ工場を訪れるため、9時30分ホテル前でバスに乗る。今日の事は窓が紫外線をよける薄いブルーがかかった硝子をはめられ、最後部にはトイレも備えてある。ヨーロッパのバスと同様椅子の間隔も十分でゆったりしている。ところが煙草を吸おうと思って灰皿を探したがどこにもない。おそろおそろ運転手に“アッシュ・トイレ?”と尋ねたら“フロア”と返ってきた。自由に床の上に捨ててよいということらしい。話は逆もどりするが、フランスで市街から空港に向う途中、時間の都合でバスの中で弁当を揚げようとしたとたん、車内が汚れるからと運転手がものすごい剣幕で怒り出したときのことと思えば、ところ変れば風習も変わるものだと、一同大笑い。

アウトバーンは、北に向えばカナダとの国境を越えてバンクーバーを通り東方に迂回、大陸を横断して東



アメリカ西部を走る高速道路

部海岸へ、南に向くとサンフランシスコ、ロサンゼルスを経てメキシコからパナマ運河にも通ずる延々数千キロにおよぶ高速道路である。名前はわからないが路肩一面に咲いている真黄色な野草やモミ、ツガの針葉樹林地帯を110キロのスピードで一路南進する。

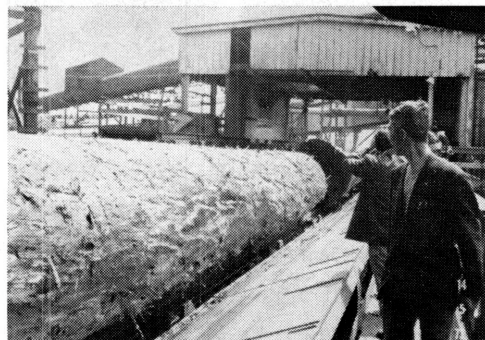
シアトルーロングビウ間はおよそ300キロ。そのまま工場に直行すると昼になるので、ロングビウに入る少し手前で横道にそれ、小公園らしいところで休憩、食事をとる。中央が細長い池、周囲ほきれいに手入れされた芝生とヤマナラシの類と思われる木立だけの平凡な公園であるが、露天の休憩用テーブルや椅子があって、紙屑など一つ落ちていないところはヨーロッパと同様、公共施設に対するデリケートな配慮のあらわれを感じる。またその公園をとり巻くようにある住宅のまわりの芝生も見事に手入れされ、庭の一部に植えられた紅、ピンク、白などとりどりの色彩で咲き乱れているシャクナゲの花々の美しさ。旅行のコースなどは、いずれ年月の経過とともに記憶から遠ざかることはあっても、これら欧米で眼のあたりに見た洋風の美しい情景は、旅行者の脳裏に終生強烈に焼きついているにちがいない。

公園からわずかな時間で工場入口に着く。この工場へは、シアトル駐在17年にもなる案内役の林さんも視察者案内では初めてで、エバレットその他は見せてくれるが、ここはなかなかOKしてくれないとのこと。ともあれ外観から判断しても大規模な工場だ。たまたま入口手前まで来たとき、当社専用鉄道から原木入工列車に出逢った。針葉樹の長尺材を満載して百余輛？。誰かが途中から8ミリカメラで収めようと廻しはじめたまではよかったが、全部行きすぎないうちにフィルムの方が終わってしまうという珍事。視察の端緒でまず1発度胆をぬかれる。

林さんが連結をとっておいしてくれたので、われわれが到着すると同時に工場案内役のジェリー・シールド氏(Mr. Jerry Shields)(工場保安責任者)が本社から車で馳せつけ、まず会議室で工場概況を伺う。それによると、アメリカにおけるすべての木材資源取扱い企業としてはNo. 1はインター・ナショナル・ペー

パーで、当社はNo. 2である。だがパルプ産業を除いた一般的木材、例えば原木、製材、合板などの取扱いは高では世界一で、社有林もう60万エーカーを保有している。当工場は合板工程1、製材工程3のほかパルプ、ダンボールなどの生産をしており、年間に製材150万ボード・フィート、合板250万平方フィート生産するという。

この巨大な工場を見るために、バスはぐるりと1廻りして製材工場の入口に横付けされる。そこはアイダホの奥地を発し、ワシントンとオレゴンの州境を通過して太平洋にそそぐコロンビア河の河口からおよそ100キロさかのぼった地点である。沖合いには何千トン扱か、かなり大きな貨物船が定泊している。アメリカ南部地方への製品輸送か、あるいは日本への原木積込みで待機しているのであろうか。一行の眼の前に、水中から径2メートルもある丸太が上がってきた。なるほどデッカイ奴だ。それがくるくる廻りながら大型水圧バーカで皮をむしりとられる。ダグラスファーの2、3メートル級になると皮の厚さが10センチ以上もあり、それらでは剥皮というより叩きこわさるという方が適切かもしれない。

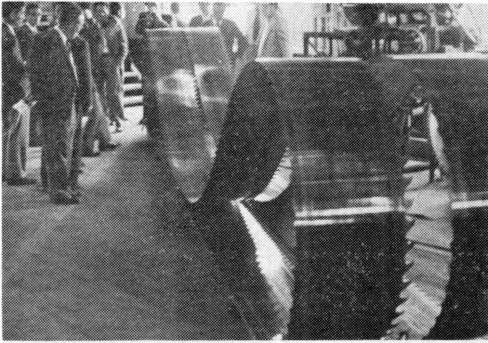


製材直前の太い原木

パーカーは自社開発によるもので、2000ポンド容量の水圧式。その先で運転中の主力製材機のご事径が96インチ、のご長7フィート、のご厚1 1/5インチ(12 B. W. G)というから、はじめて見る者にとってはとにかくそのスケールの大きさは驚きだ。この工場には新旧3系列が稼働、併せて1日約2000m³の製品を生産、これに従事する作業員は機械操作36名、その他

30名。3系列のうちNo.1系列は径30インチ上, No.2系列は20インチ下, No.3系列は両者の中間のものを挽く。そしてそれらの作業に従事する作業員の月収は1,500~1,800ドル。ただしそれから27%前後の税を引かれるため、実質収入は1,100~1,300ドル(30~36万円)。なお、わが国のようにボーナス的な臨時収入はほとんどないから、おおよそ日本の2.5倍前後であろうか。

それにしても、製材歩止り50%(工場によっては60%のところもある由)の低率に対してのシールドさんの説明では、これは会社の基本方針であるそう。すなわち当社は、歩止りアップを図るよりも1人当りの生産量上げることが主眼で、とくにこのロングピウ工場は大径材をハイ・スピードで挽き、大量生産するサンプル工場だと胸を張ってみせる。



巨大な帯鋸

パーカーでまず驚嘆の声を発しながら、やや薄暗い工場に足を踏み入れる。大割りでは1m程の挽幅の材を、せいぜい10.5cm角の二ツ割りぐらいな調子でザァーと挽き切ってしまう。見たところ木取りもなければ挽肌もおかまいなし。とにかく思いきりのスピードで切りまくっている感じた。先に進んで中割用の往復挽きのところで時間を計ったところ、材長5m程のもので片道約3.5秒。これだと1分間70~80mは走っている勘定になる。工場が広い上照明が少く、作業環境は決して立派とはいえないが、大量生産システムの雰囲気は満喫できる。縦横に走っているコンペアも早くめぐるしいばかりで、アメリカの代表的マンモス型製材工場の一断面を垣間見ることはできたが、わが国

のそれらと比較すると、何んと言っても乱棒、粗雑という感じはいなめないようだ。その中であって、コースの最後で見たプレーナがけした小幅板の女子作業員による素早い手さばきの結束作業は、機械作業優先のアメリカ方式とまことに対照的な印象をうけた。

へき2時間半の視察をすませ、林さんからアメリカ西部の林業、住宅事情、日本移民団のことなど伺いながら途中ワシントン州の州都オリンピア(Olympia)の議事堂前で小休止、17時50分ヒルトン・ホテルに戻る。

5月15日(火)晴 ウェザー・ウインター社

(Wa-sser And Winters Logging) 伐採現場

今日は造材山の伐採現場を見学する予定になっている。場所はシアトル東南寄り200キロ程のところに響えるレイナ山(Mt. Rainier 14, 408フィート)中腹のウェザー・ウインター社の伐採現場。途中、案内者に乗せるべく中間土場に立寄ったが、その原木土場のわきにうず高く集積されたパーク(樹皮)の山に興味を引かれた。林さんと同行の日本人通訳員(せこ)さんの説明によると、品名“Top salt”といい、芝生造成の際整地した地面に5cm厚に敷きつめ、その上を表土で覆い播種すると雑草が生えてこない。詳しいことはわからないが、工場で発生した樹皮を一たん紛砕したのち、何等かの熱処理をしたものである由。折りしも数台の造園会社のトラックが積込みの最中で、従来樹皮は土壌改良、公園道路などに利用されてきたことは承知していたが、雑草予防用に多量に使われているとは初耳。一応カメラに収めておく。(以下次号)



野積みされた Top salt の山

- 指導部長 -